

リレー小説「すべてがTになる」2周目

農村部

白草の場合

どうして教会なんか……。どうして私がこんな変なことに巻き込まれないといけないのよ。ああ、本当に不幸だわ。
「……ん？」

向こうに誰か倒れている。とりあえず話を聞けるなら聞いてみないと。私は倒れている人に近づいた。女の子？私と同じぐらいの女の子だった。
「ちよつと、あなた。起きなさい」

私は強めに揺り起こした。

「……ん。な、なにー。芽生？」

女の子は眠そうに眼をこすりながら起き上った。

「しっかりして。私は芽生じゃないわ。あなたは誰なの？ここはどこ？」

「んー？って、あなた誰？ここはどこ？」

「それはこっちが聞きたいのよ。あなたも分からないのね。ああ、不幸だわ」

「あなた(も)ってことは、あなたも分からないんだ？」

「そうよ、だから困ってるのよ。はあ。あなた自分の名前は分かる？」

「私は万尋！友達と遊んで、気づいたらいつの間にかここに……」

「友達って芽生って子？羨ましいわね友達がいて」

「なんで芽生のこと知ってるの？」

「あなたがさっき言ってたのよ。とりあえず二手に分かれて出口を探しましょう」

「うん。そうだね、って、あ。あなたの名前はなんていうの？」

「さあ？そんなことより、さっさと出口を探しましょう」

「ちよ、ちよつと待ってよー！」

その後私たちは二手に分かれて外へ出るための扉を探した。そして、探し始めて1時間がたった。

「な、なんなの。こんな広い教会知らないわよ。それはいいとしても、こんなに広いのに出口一つ見つからないじゃない。もう一生ここから出る事ができなかつたりして……。ああ。不幸だわ」

「ねえ！扉っぽいの見つけたよー」

遠くの方で万尋の声が聞こえた。私はいそいで万尋の元へ向かった。万尋がいた場所には大きな扉が一つあった。

「この扉なら外へ出られそうだよ！」

「そうね。なら、さっさと開けるわよ」

私は勢いよく扉を開けた。扉を開けると緑の野原が広がっていた。

「外……ね。扉見つけてくれて助かったわ。私はもう行くわね。家に帰ってやることもあるし。じゃあね」

「ええ、一緒に行かないの？」

「当たり前じゃない。二人で動く方がデメリットが大きいと考えたの。あなたも頑張って家に帰りなさい。じゃあ、今度こそ、さようなら」
私が扉を通って外に出ようとした時、強い力で腕をひっぱられた。

「あなた、いいかげんに……」

私は、万尋の腕をふりはらった。

「違うよ。あれ！」

万尋は外の空を指差した。

「あそこに何があるっていうの？ ……な、何あれ？」

空から【T】が降ってきていた。

「あ、ありえない。空から【T】が」

「多分、あれ、危険だよ」

万尋はもう一度腕を掴んだ。万尋の真剣な表情と、おかしな胸騒ぎが、あれが危険だということを告げている。

「わ、わかった。もう少し教会にいるわ」

「うん！そうしよう！」

万尋が曲がれ右をして教会に戻っていく。万尋は変わってる。あれだけ冷たくしても私を助けようとした。今まで会ってきた人とは違う。私は思わず万尋の腕を掴んだ。

「万尋！」

「ん？ どうしたの？」

「さ、さつきはありがとう助かったわ。そ、それと私の名前。白草野花だから」

「野花ちゃん……。うん！よろしくね！」

万尋は私に満面の笑みを向けた。

吉野の場合

気がつくとそのは、どこかの町のようだった。しかし人の気配が全くない。

「あれを介して別の世界に来たってことか。すごいな！」

ひとしきり感嘆してから、俺は町の探索を始めた。あちこち歩き回り、家も一軒一軒のぞいてみたが、やはり人っ子ひとりいない。

「つかれた……」

もう少しで町を出てしまう、というところまで来てから俺は座り込んだ。生暖かい風が流れていく。遠くには緑色の山が壁のようにそびえていた。
「あれを越えたら人に出会えるだろうか」

しかし本気で越えようなんて思っていない。このままでいっても人どころか動物さえいないような気がした。つまらん。やはり多少怒られても友人を呼ぶべきだっただろうか。そう思っていると、遠くの方で何か動いたような気がした。

「あ……」

あれは間違いない、人だ！俺は立ち上がり、急いでその人の元へ向かった。

「俺は吉野だ。君は誰かな？」

人を見つけた嬉しさで弾む声に、少女は怪訝そうな顔をした。

「私は、谷岡 芽生です」

多少不安は混じっているものの、冷静な受け答えだ。俺は安堵した。こんな未知の世界で行動するのに、慌てているような人は足手まといにならないからね。

「……それで、君はここがどこか知っているか？」

「いえ、まったく。さっきまで、友達の家で遊んでいたんですけど……」

気が付いたら一人で倒れていたという。その友達もここに飛ばされたかどうかは、分からないらしい。しかし、友達がここに来なかったとしても他に人がいる可能性が出てきた。思わず笑みがこぼれる。旅の仲間が多い方が楽しい。

「いやあ、やっと面白くなってきた」

「え？」

「さ、人を探しに行こう！」

眉をひそめた芽生に笑いかけ、俺は歩き始めた。

歩きながら話していて分かったことがあった。俺達はそれぞれ別の場所からここに飛ばされたが、きっかけは同じ。「T」であるということだ。

「しっかしなんでまたそんなものが」

「さあ？この世界にもあるのでしょうか」

謎は深まるばかり。

「ああー、分からないなあ」

その時、唐突にして、空一面がすさまじい威力の光を放ったかと思うと、空から何か白いものが降ってくるのが見えた。

「……なんですかね？あれは」

「うーん」

芽生は呆気にとられているようだ。まだ距離があるため、そのの正体が何か分からない。すぐに落ちてこないのを見ると、雨や雪ではないのかもしれない。大変興味深いが、今回は女の子と一緒に。余計なことをしたら彼女に何かあるかもしれない。俺はあふれる好奇心を何とか抑え、精一杯の

「頼れる先輩」を装って言った。

「危険そうではあるな。よし、走るぞ！」

丁度近くに教会が見えている。俺は言うやいなや全力で駆け出した。息は切れたが、何とか辿り着いた。扉の前にはひさしが付いているため、ここの

でしばらく様子を見ることに……」

「芽生ちゃんっ？」

てっきり一緒にいると思っていたが、芽生がいない。慌てて辺りを見回すと、地面に倒れているのを見つけた。彼女の上に、白い物が容赦なく降りかかっていた。

「いやああああああ……うう、万尋おおおお！」

叫んだのは友達の名前だろうか。白に埋まっっていく芽生を前に、俺は近づくことが出来ずにいた。どうしようもなく見ていると、俺はその白い物の正体がやっとわかった。

『豆腐』？」

空から『豆腐』が降ってきているって……どういふ状況だ？
バンッ

その時、突然教会の扉が勢いよく開く。

「うわっ！」

「き、きやああ！ 誰よあなた！！」

二人の女の子が出てくる。

「う、うわわ。これは驚いた。人がいたなんて」

嬉しい状況だが、今は単純に喜べない。

「それはこっちのセリフよ！ で、外にいたなら分かるでしょ？ どうなってるの、これ？」

片方が叫ぶ。気の強い子のような。すると、彼女の後ろからもう一人が外の様子を見てあんぐりと口を開けた。

「あ、あのお。あそこに何かあるんですか？」

俺は芽生の事もあり、ついしどろもどろになる。

「あ。い、いや。実は逃げ遅れた子が……」

「え？ 誰なのよ？ まあ、聞いても知らないと思うけれど」

気の強い方が詰め寄ってくる。もう片方は何かを思ったのか青い顔になった。

「め、芽生ちゃんとかいう子が……」

名前を告げると、二人は同時に声を張り上げた。

「芽生！！」

「谷ちゃん！！」

「知り合いだっただのか。え？ まさか、君はあの子の友達だったのかって、ちょっと！」

一人が教会を飛び出そうとするのを、俺は必死で止める。

「よせ。無茶なマネをするな！」

「離して！！ いやだあ！ 谷ちゃんーん！ いやああ」

彼女の叫びは、いまだやまない『豆腐』に吸い込まれて消えた。

「ダメだ！ あれは危険すぎる！！ 今出たら君も死ぬぞ！」

死ぬ、かどつかは正直なところ分からなかったが、彼女を止めるために叫んだ一言に、

「……死、ぬ？ い、今、谷ちゃん、が、死ぬ、って言った？ ……………ふふ。はははは。あっはっはっは」

ゆっくりと膝から崩れ落ちた。気の強い方が慌ててしゃがみ込み、彼女の背中をさする。

「……落ち着いて、万尋。ね？ 落ち着いて」

ふと外を見ると、芽生が倒れていたところが小さく山になっていた。俺はなすすべもなく、立ち尽くしていた。

唐突に起きた大きな揺れによって、私はゆっくりと目を開けた。
「ちよっと、あなた。起きなさい」

私は谷ちゃんに返事をした。が、いつもと反応が違った気がした。

そして、ぼんやりしていた視界がだんだんと十字架にかけられたイエスを捉えた。

「しっかりして。私は谷ちゃんじゃないわ。あなたは誰なの？」

「あれ谷ちゃ——ん」って、あなた誰？ ここはどこ？」

どうやら彼女もどうしてここにいるのかは分からないらしい。

「それで、あなた、自分の名前は？」

「私は万尋！ さっきまで友達と遊んでただけど、気が付いたらここに……」

「友達って谷ちゃんって子？ 羨ましいわね」

あれ何だか寂しそうに見えるのは私だけかな。って、そうじゃない！この子何か谷ちゃんの事知ってるのかな。

「あなたがさっき言ったのよ。とりあえず二手に分かれて出口を探しましょう」

彼女はそういってすくっと立った。

「わ、待って。ねえ名前は？」

しかし彼女はなぜか教えてくれなかった。

そしてそれから半刻ほど経ったとき、私は祭壇に置いてある聖書のような物を見つけた。やった！ 聖書じゃなかったけど、この地図だ。……と、あとそれとこれは——え？

※※※

どこだろう、ここは。

目を覚ますと、そこは薄暗くて遠くの方から吹き降りてくる生暖かい風が、さっきから奇妙なほどに不気味さを醸し出している。

ふと辺りを見回すと、さっきまで一緒にいた万尋はいない。その代わりに、向こうの方に若い男性がいる。あっちも私に気が付いたらしい。

「俺は、吉野だ」

「私は、谷岡 芽生です」

とりあえず元に戻る手がかりを探すことになり、私たちは歩き始めた。

「……それで、君はここがどこか知っているか？」

「いえ、まったく。さっきまで、友達の家で遊んでいたんですけれど……」

「と言うことは、その友達もここへ？」

「さあ……それは分かりません。気が付いたら、私一人でしたので」

その時、唐突にして、空一面がすさまじい威力の光を放ったかと思うと、空から何か白いものが降ってくるのが見えた。

「……なんですかね？あれは」

「うーん。しかし危険そうではある。よし、走るぞ！」

そう言って吉野さんは、ここからほど近い、教会のような建物をめがけて走り出した。私も後を追って走った。空から降ってくる白いものは、だんだんと近づいてきた。しかし、それが近づいてくるにつれて、私の中では混乱が生じていった。

なぜ？空から豆腐が降ってくるのだ？

「ふう、危ない。何とか避難できた。あれ？芽生ちゃんは……まずい。あれじゃ間に合わない！」

どうしよう。もう、すぐ上まで豆腐が近づいているのに！ぎりぎり間に合うか？

息はもうとつくにきている。私は己の力をすべて出して走った。

しかし、女神様はときに残酷だ。

あと数メートルのところで、よりによってこけさせるなんて――

走っていたスピードで地面に叩きつけられた私の上に、豆腐は殺人鬼となり、尋常でない数が容赦なく押し掛かった。

「いやああああああ……うう、万尋おー！ー！」

「……？あれ？今、谷ちゃんの声があったような……」

「確かに、悲鳴みたいな声だったわね。とりあえず、外の様子を確認しましょう」

そう言って、野花ちゃんは勢いよく教会の扉を開けた。

「き、きやああ！誰よあなた！！」

「う、うわわ。これは驚いた。人がいたなんて」

「それはこっちのセリフよ！で、外にいたなら分かるでしょ？どうなってるの、これ？」

野花ちゃんの後ろから覗くと、あんぐりと口を開けた。

一面、豆腐で埋め尽くされているのだから。その中に、一か所だけ、こんもりと盛り上がっているところが見えた。

「あ、あ、あ。あそこは何かあるんですか？」

「あ、い、いや。実は逃げ遅れた子が……」

「え？誰なのよ？まあ、聞いても知らないと思うけれど」

「め、芽生ちゃんとかいう子が……」

芽生

谷ちゃん

野花ちゃんと私は同時に声を張り上げた。

「知り合いだったのか。え？まさか、君はあの子の友達だったのか？って、ちょっと！」

私は「はい」と返事をする前に教会から飛び出そうとした。しかし、扉に立っていた谷ちゃんを知る男性に腕をつかまれた。

「よせ。無茶なマネをするな！」

「離して！！いやだあ！谷ちゃーん！いやああ」

「ダメだ！あれは危険すぎる！！今出たら君も死ぬぞ！」

「……死、ぬ？い、今、谷ちゃん、が、死ぬ、って言った？………ふふ。はははは。あっはっはっは」

「……落ち着いて、万尋。ね？ 落ち着いて」

女神様は、本当に残酷だ。大切なものなんて関係ない。

いや、今回ばかりは違う。豆腐だ。豆腐がすべて悪い。豆腐なんて、この世に存在しなければよかった。

“そんなことでは、豆腐屋の娘は失格だ”

もう、こんな感情も持てなくなった私の手からは、真二つに割れたジェンガのパーツが静かに白い床へと落ちた。

高野

木柱の場合

木柱と広津が気づいた時にいた場所は、何やら茶色っぽく、やわらかい地面の上だった。広津が足元を見つめながら言う。

「何なんですかねえ、このクツシヨンみたいな地面。あ、踏んだらなんか汁みたいなのが出てきますよ。お、足を離したら汁が吸いこまれた。これ何なんでしょうねえ。面白いなあ。ねえ、そう思いませんか？」

広津は木柱に同意を求めて顔を上げた。しかし、そこにいると想定していた場所に、木柱はいなかった。「……あれれ？」

周りを見回すと、はるか五十メートル後方に、歩いている木柱の背中が見えた。どうも、広津が一人でしゃべっているうちに、あれだけ移動したらしい。

「ちよ、ちよと待ってくださいよお」と、広津は走りだした。

しばらく走って木柱に追いついたものの、木柱は驚くほど歩くのが速い。だから、木柱の横を歩いているだけだというのに、広津はまだ半分走っている気分だった。息が荒いまま、広津は言った。

「どうして先に行っちゃうんですか。というか、どこを目指してるんですか？」

「何かがあるところだ」木柱は平然と言った。

「何かあるところですか？」

「面白そう、何かだ」

質問しても、要領を得ない答えが返ってきた。広津は別のことを訊く。

「どうしてそんなものがあると思うんですか？」

「私が望んでいるからさ」

これまた要領を得ない。ただ、その答えを素直に受け取ってしまうのが広津だ。

「ふうん。じゃあ、どのくらいでその、面白そうな何か、にたどり着きますかねえ」

「知るものか。私が暇を持て余し始めるまでには着くだろう」

かなり乱暴な発言だが、それもやはり、そのまま受け取る広津。

「……あ、そうそう。さつきから、というより最初からずっと気になってたんですけど、ここ、どこですかね」

「知らん」

「へえ、先生にも知らないことがあるんですねえ」

「当たり前だ。知らない場所でないければ、私が楽しめないだろう」

木柵は歩きながら辺りを見回して言う。

「そうだな……そろそろこの景色にも慣れて、新鮮味がなくなってくるころだ」

周りに見えるのはほとんどが青い空と、茶色っぽい地面。今、木柵たちが向かっている先に、丘のように地面が盛り上がっているとどこかがあるだけだ。振り向けば、地平線が見えるのみ。そちら側には少なくとも、何も無いだろう。

「暇になる前に、何かが起こってくれればいいが……」

木柵がそう言った途端、広津が声を上げて立ち止まった。

「あっ。向こうに何か見えますよ」

進行方向とは逆の方向。地平線のあたりに、米粒どころかゴマ粒よりも小さく見えるそれ。

「どうします。あっちに行ってみましょうか」

「いや、おそらくあれは関わるべきでないものだ。このまま進むぞ。ペースも少し上げたまえ」

もともと早歩きであったのに、さらに速度を上げられて、広津は小走りになった。

やわらかく茶色い地面と同じ物質でできた丘に到着した二人。振り返れば、先ほどの、何か、が近づいてきているのが見える。まだまだ小さく見えているが、確かに近づいては来ているのだ。二人が丘を登ると、その丘の向こうに視界が開けた。

白い街がそこにあった。

「わあ、すごいですねえ、あれ。全部白一色で統一された街ですよ」

「なるほど、なかなか面白くなってきたじゃないか」

そう言って木柵は、街に向かつて丘を下り始めた。が、その途中でふと足を止め、左の岩陰——とは言っても岩ではなく、例の物質だが——に目をやった。広津もつられてそこを見る。すると、どうやらその場所には、洞穴のように、人の通れそうな穴が開いているらしい。

広津はその穴に近寄って、真っ暗な穴の奥をのぞき込みながら言った。

「何でしょうね、この穴……」

「わからん。が、面白そう。入ってみたまえ」

「ええっ、僕一人ですかあ？ 嫌ですよそんなの。こんな真っ暗で何も見えないようなところに入るなんてそんな——」

「このライターをやるから、行きたまえ」木柵は百円ライターを投げてよこした。

「わ、わかりましたよお……」

広津はそのライターをつけながら、中に入ってしまった。が、しばらく進むと広津の「あちっ」という悲鳴とともにライターの明かりが消えた。

「百円ライターをつけっ放しにするとすぐ温度が上がるのは常識だろう」

木柵はあきれたように言った。

「じゃあ、どうしろって言うんですか」

「つけて辺りを確認したら消して進み、またつけて辺りを確認する、という作業を繰り返せばいい」

「そんな殺生な……」

「さっさと行きなさい」

抗議の言葉も木柱に一蹴され、仕方なく言われた通りに進む広津。ライターをつけ、辺りを確認。少し進み。またライターをつけて確認。それを繰り返しているうちに、広津は洞穴の角を曲がってしまったのか、明かりが外からは見えなくなった。

木柱はそれを確認すると、もう一度丘を登って、地平線の向こうから近づいてきている何かを確認した。米粒ほどの大きさにはなっている。あまり時間はないかもしれない。木柱はそう考えながら、また洞穴の入り口に戻った。

そこにちょうど、広津の声が聞こえてきた。

「着きましたあつ。行き止まりですけど、何かありますよっ」

洞穴内で反射してエコーがかかった声だ。

「わかった。今行こう」

そう言って、木柱は懐中電灯を取り出した。それで洞穴内を照らしながら、木柱は進む。

一分もたないうちに、最深部までたどり着いた。

「せ、先生っ、懐中電灯を持ってるなら貸してくださいよおっ」

叫ぶ広津に、冷たく木柱は言い放った。

「一つしかないんだ。君に貸して、もし返ってこなかったらことだからな。貸せるはずもない。……それで、何かあると言っていたが、それはどこだ？」

「はあ……。これです」

広津が指さした方を木柱が照らすと、そこには長方形の白い箱が置いてあった。

「ほう。開けてみたまえ」

「また僕がやるんですかあ？ ……別にいいですけど」

「危険があることは君がやるんだ」

「勘弁してくださいよ」

そう言いつつも広津は箱を開けた。その箱の中には――。

「はははっ。これはいい。傑作だ」木柱が高笑いする。

「そ、そうですかねえ……」一方広津は微妙な顔だ。

「こんなものが入っているとはな。これを残した人物はなかなかの酔狂らしい」
木柱と広津はその箱の中身を持って、家を出た。

青い海

紫堂の場合

皆さん、いきなり知らない場所に来ていたら、どう思いますか？　というか、どうしたらいいですか？

今、俺の目の前には海が広がっている。写真で見たままの、青い海だ。もちろん俺は生まれてこの方、海に行ったことがない。

俺はさっきまで家の階段を駆け下りていたはずだ。それが何故海にいるのか。訳が分からない。混乱は時間が経つほどに増していく。俺は、無性に叫びだしたくなった。だから、

「うわあああああああ！」

叫んだ。意味もない、言葉とも言えない音を。けれど、叫んだところでどうしようもなくて、俺はへたへたと砂浜に座り込んだ。

そのまま座り込んでどれくらい経つただろうか。俺は、とんでもない空腹に襲われていた。

「くそっ、そういえば朝ご飯食べてなかった」

そんなことを呟いてもお腹は空いたと主張するばかりで、なんの役にも立たない。むしろ足を引っ張っている。

「取りあえず、ここにいたってどうしようもないから、動こう」

そうだ、ここにいたって、助けが来るとは思えない。どこか別の場所へ行けば人に会えるかもしれないし。もし会えたら、その人にここがどこのか教えてもらえばいいんだ。そうしたら、帰るめどが立つかもしれない。

することが決まれば、俺は途端に元気になる。お腹は空いたまままだというのに、なんと単純なのだろうか。

「海が南だから……東が西か北か……よし東だ」

方向を決めて歩き出す。ほどなくして、民家らしき建物が見えてきたが、人の姿は見えなかった。また歩き出す。またほどなくして民家が見えたがそこにも人はいない。そしてまた歩き出して……

「だあああ！　全然人いねえし！　足疲れた。休憩だ、休憩」

歩けど歩けど見えるのは家のみで、人影は一切ない。やっつけられないと、足を投げ出して寝ころぶ。地べたなんてことは気にしない。というか砂浜に座っていた時点で、服はもうどろどろだ。

寝ころんで考える。どうして家はあるのに人がいないのか。一軒だけだったら働いているからいないのかなんて考えられるが、その辺り一帯全ての家に人がいないのだ。これは偶然と呼ぶのは少し難しい。つまりこれは何かしらの原因があるのだ。それも人為的なものだ。

「うーん、全く分からん！　諦めよう」

早々に考えるのを諦めた。俺は何か考えるのは向いていないのだ。

そこまで考えたところでまたぎゅるとお腹が鳴った。

「俺はさっさと帰ってご飯を食べるんだ」

妙な使命感にかられてまた立ち上がる。動機はよく見るヒーローのそれとは違うが、立派な理由になるだろう。だって、俺は成長期の高校生だし、一般人だ。平凡な理由ぐらいでしか、ここから立ち上がる勇気が湧かない。そしてこの異常な場所を受け入れる覚悟も。

白い街

理人の場合

「うう……」

意識が朦朧とする。息も荒くなっていた。多分、熱中症だ。

さつき、よくわからないままに走ったのがいけなかったのかもしれない。

俺はカバンから水筒をだした。

本当は、アヤマちゃんのために用意したんだけど……。

心の中でアヤマちゃんにあやまりつつ、水筒の中のお茶を飲んだ。急に飲むと、吐いてしまうような気がして、ちびちびと、少しずつのんだ。しばらくして、

「――」

あつ、今意識が途切れた。

ああ、熱失神か。

そして、全身の力が抜けたような感覚。俺は地面に倒れこんでしまった。

恵奈の場合

「へえー、こんな感じなのね」

この世界に来て、約二十分。怪原恵奈は、高層ビルの数十階が猛スピードで通り過ぎていくのを尻目に、「偵察」を行っていた。

そう、彼女は人間ではない。今露わになっているのは、カラスのように真っ黒で巨大な翼だけが、本来の姿は半人半蛇の有翼の怪物・エキドナである。蛇神メデューサと海神ポセイドンの孫であり、「怪物の母」という異名で恐れられてもいるのだ。

そして、彼女はその翼を惜しげもなく広げ、空を飛んでいる。先も述べたように「偵察」だ。戦いにおいて地の利を抑えるのは戦術の基本、そしてここは完全に、恵奈を連れ込んだ「敵」の陣地。少しでも不利を減らすため、この世界について知っておかなくてはならない。

スタート地点の都市をやっと抜け出し、行く手には荒野、そして左下のほうに白い街が見える。文字通り、建造物も道も標識も、何もかもが白い。少し興味を覚えた恵奈は、街を調べるため、進行方向を北東に取った。高度も下げ、三階建ての家の屋根スレスレを飛ぶ。

余談だが、恵奈が正体を顕しても、普通の人間に気づかれることはない。霊的な存在となるため、同類もしくは靈感のある人間にしか見えないのだ。

(……いい街並みね)

昔(といっても三千年ほど前)住んでいた、地中海近辺の街に似ている。建物全てが白いという光景は異様ではあるものの、恵奈にとっては少し懐かしい。

ちょっとした郷愁にとらわれていると、

「……あら？」

視界の隅に、黒い何かが映った。この白い街で、明らかに異質な何か。

多少の危険は承知で、恵奈は急ブレーキをかけ、ゆっくりと着地する。翼をしまつて、翼を出すために開けていた背中ボタンをとめ、物陰からそつとそれを見てみた。

「っ！」

人だ。人が倒れている。高校生くらいの男の子……ちょうど、うちの次男と同じくらいだろうか。

「ちよっとあなた、どうしたの！ だいじょうぶだ！」

思わず息子の姿が重なり、駆け寄ってみると、顔が赤くなっていて、息が荒い。何度か呼びかけたが、意識が朦朧（もうろう）としているようで、反応がない。

おそらく熱中症だ。こういう場合、あまり頭を揺らしてはいけない……しかし、直射日光にさらしておくわけにもいかない。とりあえず日陰に運ぶことにして、お姫様だっこをしようと、彼の体に手を回す。人間を超越した怪物である恵奈には、人一人運ぶことなど朝飯前の運動にもならないことだ。

——しかし、それは阻まれた。

「え、あ、え？ ……理人？」

小学生……いや、中学生か？ 童顔だが、雰囲気が見た目と合っていないのでそう分かる少女が、突然そこに現れた。

「お前、理人に何をした！」

「……は？」

出現した少女、そしてその思わぬ反応に、恵奈の思考はひととき停止する。

その意識のスキを突くように、少女が、

「見るなっ！」

叫ぶと同時に、少女は恵奈に肉薄し、かなりの身長差も詰めて、どこから取り出したスプレー缶のノズルを引いた。

「きゃっ！」

霧散した液体が、恵奈の視界を奪うと同時に、目、鼻、口に強烈な痛みを与える。

思わずうずくまった恵奈に、少女はとどめを刺そうと、新たな武器、スタンガンを、間髪いれず叩き込む。

「きゃんっ！」

きれいに後頭部に押し当てた。あと3秒もすれば、この女の意識は飛ぶことだろう、と少女は心の中でつぶやく。

だが——そう、簡単にはいかなかった。

「ふう……ずいぶんと、刺激的なことしてくれるじゃない。おかげで目が覚めたわ……あ、目は開かないけど」

「なに？」

何事もなかったかのように、恵奈は立ち上がった。あり得ない事態の発生に、少女は後ろに飛び退く。

「一発目は催涙スプレー、そして二発目はスタンガン……かしら？ でもそんな玩具おもちゃじゃ、わたしの視覚を奪うことなんてできないはずだけど……

あなたも、何か人ならざる者だともいうの？ それとも、『英雄』？」

「英雄……？ わけの分からないことを言うんじゃない！」

怒りに吞まれた少女は、恵奈が立ち上がった理由を考えることはしなかった。

「お前も『教団』の人間なんだろう？ こんなところまで、何をしにきたっ！」

「……何を言っているの？ 『教団』？」

「だまれっ！ これ以上の無駄口は無用……動くなッ！」

少女が再び叫ぶ。これによって、恵奈の動きは今度こそ止まった、はずだ。だというのに、

「無駄よ。すでにあなたの異能は『視えて』いる」

停止したかのように見えた恵奈の体は、一秒とたたないうちに動き出し、

「はあっ！」

一瞬、彼女の左脚がぶれたかと思うと。

「……え？」

突風が少女の肌を通過し、彼女の眼前には、大きな溝が恵奈の左足のあるところから一直線に形成されていた。それも、少女の足元ほんの数センチのところまで。

『未来』はすでに確定しているのよ。からくりさえ知ってしまえば、どうということのない異能……所詮、わたしには勝てない」

足元に落ちていたスタンガンを拾い、恵奈は跳躍のために身をかがめる。

「待てっ！ 来るな、来るな、来るなあっ！」

言霊の強制の力を少女は吐き続ける。だが、それらは恵奈の跳躍の時を一瞬延ばすだけで、少女の敗北という未来を覆すには、少々力不足だった。ついに恵奈が少女に向けて跳躍した——と思ったときには、既に彼女は少女の後ろに立っていた。

動くな？ 待て？ 来るな？

……全て、

「断るわ」

逆手に持たれたスタンガンが、少女の後頭部に振り下ろされた。「きゃっ」と悲鳴をあげた少女は、その場に倒れた。



「……うわっ、眩しい」

ひとまず、一件落着である。少女が倒れた瞬間に、恵奈の閉ざされていたまぶたも開いた。

それにしても、近年急増中の『英雄』の生まれ変わりならともかく、ナチュラルボーンの異能力者に出会えるとは思わなかった。『視えた』限りでは、『言葉で相手を服従させる』能力。

正直、彼女が相手だったことに少しほっとしている。未だ冷静な判断力を持たない子どもだったから、小手先の脅し程度でおびえてくれたが、もしも老練の術師が相手だったとしたらどうだろう。例えば、『視る』ことによるリサーチなしに、いきなり背後から『死ぬ』と言われたら？ この身に流れる四分の一の神の血はきつとその『言葉』に打ち勝つだろうが、わたしのエネルギーのほとんどはその『言葉』への対抗に使われ、とても今のようには戦えなかっただろう。もしかすると、切り札を使うことになったかもしれない。

「……んんあ？」

背後から聞こえたうめき声に、惠奈ははっと振り返った。

「ああっ、ごめんなさい！ あなたのこと、すっかりわすれていたわ！」

惠奈が最初に見つけた少年（リト、だったか？）が、なんとか意識を取り戻したようだ。

「俺は死んだのか？」

「大丈夫？ あなた、ここに倒れていたのよ。まあ、ここがどこなのかは、わたしも知らないのだけれど……ん？ どうしたの？」

惠奈の声に振り返った理人は、あんぐりと口をあけ、言葉を失っていた。その視線は、惠奈の胸元あたりを右往左往……。

「こほん。その年ごろだから仕方ないとは思うわ。わたしも、自分のカラダの威力くらいは、よく分かっている。でも、だからといって、あまりじろじろ見られるのは、その……は、恥ずかしいわ」

「あ、ごめんなさい……」

惠奈はポツと顔を赤らめて、そっぽを向く。まったく、これだから男というものは……見た目が三十代前半のころから変わっていないと、こういうことは多々ある。

「俺は、助かったんですか？」

「そうね。正確には、わたしはあなたをまだ助けてはいない。でも、助けたと言えるかもしれないわ」

「どういう意味ですか？」

理人はあからさまに、顔に疑問符を浮かべる。

「最初は、あなたをどこか日陰に連れて行こうと思ったのだけれど。そこに倒れている女の子が、いきなり襲いかかってきたのよ」

惠奈は、おもむろに後ろを指差した。そこで理人は、初めてそれに気づいた。

「あ、アヤメちゃん！」

「あら、あなたの知り合い？ ……ははあ、なるほどね」

なんとなく、惠奈は察しがついてきた。『教団』というのが結局何だったのかは分からないが……要は、少女はこの子を守ろうとしていたのだ。そこには特別な感情も、多少なりとも含まれているのだろう。

「本当、青春してるわね……じゃ、そんな若者には、おばさんがごほうびをあげちゃうわ」

「ご、ご、ごひょうび？」

『ごほうび』と聞いて、理人は無意識にやらぬことを想像してしまった。……まあ、こんな妖艶な女性に言われたことだから、仕方ないといえば仕方ない。だが、世界はそう甘いものではない。

惠奈の右手が一閃すると、彼女のもう片方の手のひらから、血がふしゅっと噴き出し、そのままどくどくと流れはじめた。

「え？ 何をやってるんですか！」

「飲みなさい」

「は？」

「いいから。飲みなさい」

そう言っつて、惠奈は理人に歩み寄る。精いっぱい抵抗にと、理人は後ずさりを試みたが、それも惠奈のひとにらみで動けなくなる。

「ひいっ！」

がしゅと顔をつかまれる。いやでも、血液が口に入ってくる。引きはがそうとしたが、プロレスラー並みの怪力で掴まれているため、びくともしな

い。

数十秒の後、恵奈はやっと手を離した。

「ごほっ、ごほっ……な、なにするんですか！ その、血なんか……あれっ」

地面に倒れこんで、見上げると、恵奈の左手には傷がない。血はついてるものの、肌の表面はなめらかだ。

「つばをつけておけば治るって、聞かないかしら？ あなたの唾液がついたから、治っちゃったのかも……うふふ」

恵奈は左手の平の血を、長い舌で艶なまめかしく舐めとった。

（こ、これっていわゆる間接……）

「ふふ、意識した？」

「い、いえ、なんでも。のどが渴いたまんまでもないです」

いちいちセクシーな恵奈に、理人の頬には赤みがさす。

「それより。何か変わったことはない？」

「え？ あ、あっ」

理人のほうも、取り憑けんたいかっていた倦怠感が、嘘のように消えている。

「ほうら、ごほうびだったでしょ？」

「あ、は、はい！ ありがとうございます！」

種類によるが、怪物の血は強壯剤ともなりうる。特に恵奈のものはその効力が高いらしく、スタミナ回復にはもってこいなのだ。

恐縮する理人に、恵奈はパチリとウインクを決める。こういう仕草しくさを一切の照れもなくできるところも、彼女の魅力のひとつだといえるだろう。

「さあて。わたし、そろそろ行こうかしら」

「え？ なぜです？」

うーん、と恵奈は伸びをする。天文学的に大きい胸が、さらに強調される。

「わたしとしては、別にあなたたちと一緒に、この辺りを散策しても構わないけど。その女の子……アヤメちゃん？ には、ちょっと嫌われちゃっ

たと思うのよね……」

「そんなことないですよ！ ちゃんと事情を話せば、彼女もきつとわかってくれます！ ……何よりその、おっp……あなたと、離れるっていうのは

ちょっと

「今、明らかに不穏なことを言いかけたわね？ ……とにかく、若いふたりの間に、おばさんは邪魔者ってこと」

くるり、と恵奈は理人に背を向ける。

「それじゃあね。しっかり青春しなさいな」

背中ボタンを開け、真っ黒な翼が顔を出す。途端、

「っ！ あれ、どこ行ったんですか？ お姉さん！」

理人の視界から、恵奈は消えた。いや、実際にはそこにいる。ただ、彼には見るための才能がないだけだ。

「感じたわ。あなたも、数奇な星の下に生まれたのね。でも、決してくじけてはいけない。信じて戦えば、この世の法則が、必ず力を貸してくれるか

ら

「えっ？ ど、どこですか？」

その言葉だけを彼に残して、恵奈は翼をひろげ、大空へと飛び立った。

※ ※ ※

理人の場合

「……んんあ？」

気が付けば背中に固い感触。起きあがってみると、白いアスファルトだった。

体中にあふれる倦怠感けんたいかん。起きあがるだけでつらいな。

俺が自分の状態を分析していると、

「ああっ、ごめんなさい！ あなたのこと、すっかりわすれていたわ！」
という声が聞こえた。

振り返ると、明らかにバストが膨らみ過ぎ、ウエストが締まりすぎ、ヒップが膨らみ過ぎな女性がいた。

「俺は死んだのか？」

うん、こんな幻覚を見てしまうなんてもう俺は死ぬんだ。いや、もう死んでいるのかもしれない。

「大丈夫?? あなた、ここに倒れていたのよ。まあ、ここがどこなのかは、わたしも知らないのだけれど……ん? どうしたの?」
おっぱいがたゆんたゆんでおしりがぷりーんぷりーん

意識してないよ、意識してないよ、別に俺はどこも見ていないよ!

「こほん。その年ごろだから仕方ないとは思うわ。わたしも、自分のカラダの威力くらいは、よく分かっている。でも、だからといって、あまりじろじろ見られるのは、その……は、恥ずかしいわ」

ああ! ばれちゃった!

「あ、ごめんなさい……」

俺が慌てて言ったら、女性は顔を赤くして、顔を逸らした。

「俺は、助かったんですか?」

「そうね。正確には、わたしはあなたをまだ助けてはいない。でも、助けたと言えるかもしれないわ」
「どういう意味ですか?」

はつきりしない言い方に首を傾げると、

「最初は、あなたをどこか日陰に連れて行くこうと思ったのだけれど……そこに倒れている女の子が、いきなり襲いかかってきたのよ」
と、女性は言っていて、向こう側を指差した。

その先を目で追うと、そこには、俺の大切な友達であり、守らなくてはいけない対象であり、そしていつかは見捨てなくてはならないヒロイン、
「あ、アヤメちゃん!」

「あら、あなたの知り合い? ……ははあ、なるほどね」

女性は、何かを察したようだ。そして、

「本当、青春してるわね……じゃ、そんな若者には、おばさんがごほうびをあげちゃうわ」

と、素敵なことをおっしゃった。
「じ、じ、じひょうび」

え？ 揉ませてくれるの？ マジ？ いいの？ って違う！ これは俺の本心じゃない！ でも、これは男の性でして……。あ、でも齒ミガキや耳かきはされてみたいかも。

しかし、俺の考えていた「褒美とは違った」。

女性は、左手を右手で切りつけた。血が噴き出て、どくどく流れ出る。

「え？ 何をやっているんですか！」

言ってる間に、どんどん血が流れていく。あのままだったら、一気にショック症状になるぞ。しかし、女性はさらに予想外なことを言った。

「飲みなさい」

「は？」

「いいから。飲みなさい」

女性は、じりじり、左手から血をふきださせたまま、俺に歩み寄ってくる。

本能的に俺は後ずさりしていた。しかし、女性の、無表情な瞳、何の感情を示さない冷酷な目、まるで、『教団』側の人間のような目に睨まれて、俺の体は硬直した。

「もがっ」

顔を掴まれる。そして頬越しに指を入れられ物理的に俺の口は開かれた。血を流しこまれ、口の中に鉄の味がする。

やめろ！ やめてくれ！

どんどん血は流し込まれた。

喉を通りすぎる熱い液体。焼けるような感覚。そのおぞましい行為に一切の抵抗を許されなかった。

たっぷり三十秒はかけて、女性は俺を解放した。

「ごほっ、ごほっ……」

無理やり流し込まれたため気道に入って咳き込む。

「な、なにするんですか！ そ、その、血なんか……あれ？」

俺は目の前でありえない現象が起きていることに、一瞬呆然とした。女性の左手の傷はふさがっていた。

なんで？

「つばをつけておけば治るって、聞かないかしら？ あなたの唾液がついたから、治っちゃったのかも……うふふ」

女性は、左手の平の血を、長い舌で艶めかしく舐めとった。

ペロリ

赤い血が拭き取られ、代わりに透明な唾液があとをひく。

こ、これっていわゆる間接……

「ふふ、意識した」

俺がそう言うとう女性は妖艶に笑って言った。

「い、いえ、なんでも。のどが渴いたまんまでもないです」

「それより。何か変わったことはない？」

「え？ あ、あっ」

身体が軽い。さっきの倦怠感が嘘みたいだ。

「ほうら、ごほうびだったでしょ？」

よくわからないけど、あの血みたいなのはただの補水溶液だったのかな。それにしても鉄分が多めなような。

「あ、は、はい！ ありがとうございます！」

女性はパチリとウインク。

普段だったら俺の心臓は撃ち抜かれていただろうけど、今のこの状況のせいで俺はそうならなかった。

「さて。わたし、そろそろ行くこうかしら」

「え？ どうしてですか？」

「わたしとしては、別にあなたたちと一緒に、この辺りを散策しても構わないけど。その女の子……アヤメちゃん？ には、ちよつと嫌われちゃったと思うのよね……」

あ、今さっきまで忘れてたよ。ごめんね、アヤメちゃん。

「そんなことないですよ！ ちゃんと事情を話せば、彼女もきつとわかってくれます！ ……何よりその、おっp……あなたと、離れるっていうのはちよつと」

「今、明らかに不穏なことを言いかけたわね？ ……とにかく、若いふたりの間に、おばさんは邪魔者ってこと」

「それじゃあね。しっかり青春しなさいな」

「っは あれ、どこ行ったんですか？ お姉さん！」

女性が、背中に手を回したと思うと、突然その姿が消えた。

「……感じたわ。あなたも、数奇な星の下に生まれたのね。でも、決してくじけてはいけない。信じて戦えば、この世の法則が、必ず力を貸してくれるから」

どこからか声がした。

「えっ？ ど、どこですか？」

俺が問いかけても、もう声はしない。

もう、どこかへ行ってしまったのかな。

※ ※ ※

しばらくして、アヤメちゃんは起きた。

「ああ、よかった、大丈夫？」

「理人、おまえ、どうした？ 口から血が……」

言われて口を拭いてみると、乾いた血がはがれた。

「誰にやられた！」

これはどう收拾ついたらいいのだろう。

「ああ、これは大丈夫、それより、アヤメちゃんは？」

俺は口元を拭いて適当にごまかした。

「わたしも問題ない。それより、さっきの女は？」

「ああ、あの人は敵じゃなかったみたい。熱中症で倒れた俺を介抱してくれたんだ」

「そうか、悪い事をしてしまった」

悪い事？

「ところで、これから一体どうするつもりなんだ？」

「どう、って言われてもなあ」

正直、どうやって元いた場所に戻ればいいのか見当もつかない。

「とりあえず、俺たち以外にも人がいるようだし、探し回って見ようか」

俺たちは、歩き出した。

恵奈の場合

結果、偵察は続く。変わり映えのしない白い街並みの中を、恵奈は延々と飛び続けている。そして、ふと気づいてしまった。

（あつ……そういえば、あの子たちに何も聞けなかったわ）

ここはどこなのか。一体どういう世界なのか。いろいろとごたごたが多すぎて、そういったこの世界の基本情報を聞き出すのを忘れていた。

いや、そもそも彼らがこの世界の人間なのかどうかも分からない。わたしと同じように、この世界に連れてこられた可能性も否めない。一応、下の名前らしきものだけは聞き出せたが……一体それが、何の役に立つというのだろう。

慌てて引き返してもいいが、理人にも言ったように、わたしはおそらくあの少女に恐怖されるだろう。再び戦闘になるかもしれない。一瞬で沈黙させられるとはいえ、あまり面倒なことは避けたいし、何より彼女が可哀想というもの。

そうと決まれば、もう遭遇しないように、この街から出なくてはならない。ちょうど街の出口も近そうだ。

そこで……白い街のイレギュラーが、再び恵奈の前に顔を出した。

「……ん？」

今度は、それは生き物ではなかったし、街と同じように白い。それでいて、普通の街に存在しても何の違和感もないものである。

簡潔に言うと、石碑だ。白い石碑。

少し気になって、恵奈は石碑のそばに着地した。またも翼をしまつて、シャツの背中のボタンを留める。明朝体で刻まれた碑文を、声に出して読んでみる。

「条理を越える英雄等、数多の扉のその先に 光求むるならば 彼の地滅ぼす天魔の 冷たく、白き、その心 舞い踊る海の拍子木と 蒼く細い大地の恵み そして、一滴の琥珀色の涙を……。詩、かしら？ 素敵な響きね」

古代ヨーロッパあたりの、叙事詩のような響きだ。最近の言い方をすれば、少し厨二臭いが……まあ、嫌いではない。むしろ好きだ。大好きだ。

何を言っているのか全く分からないあたりが特に。

一応、スマートフォンを取り出し、写真にとっておく。もちろんピースばっちりの自撮りだ。少しポーズも変えて、4、5枚ほど撮る。年齢よわい三千を越しても彼女が見た目も心も若々しいままでいられるのには、こういった若い文化にすぐに順応できるということも、少しは関わっているのだろう。「おっ、いい感じに撮れているわ。帰ったら、みんなに見せてあげましょう」

記念撮影も終え、恵奈は三度飛び立つ。特に行くあてもないので、とりあえず始まりの都市に戻ってみることにした。あそこなら、理人たちに会う危険もないし、多少くつろげる場所もありそうだ。

『帰る』という前提を、恵奈は疑いもしなかった。『視(み)通(とお)さ』ずとも、彼女には確信がある。必ず、生きて家族のもとへと帰れるという、確信が――

紫堂の場合

歩き続けてどれくらい経っただろうか。やっと大きなまちが見えてきた。俺はやっと見えてきたそれに喜んで足を速めた。それは、見たことがないほど白い街だった。建物も舗装された道も全てが白い。そういえば、この間母親が、ギリシヤかどこかのある街がすごく白いのとかなんとか言っていたが、それはこんな感じなのだろうか、などと取りとめのないことを考える。

街の中に入って、俺は落胆した。やはり、ここにも人がいるようには思えなかった。民家も店もあるのに、人の気配が全くしない。また、どっと疲労感が襲ってきた。ここまで来ても人に会わないのだ。帰ることも絶望的に思えてきた。

「いや、まだ諦めちや駄目だ。広いんだし、探せばきっといるさ」
なんとか自分を奮い立たせ、街の中心部へ向かうように歩き出す。
「やっぱどこもかしこも白いなあ。綺麗だけどころと怖いな」

街は中心部も白かった。それは、現実からは乖離したように美しく、そして恐ろしくもあつた。俺は、自分だけが、この街で異物であるかのような錯覚を覚えた。

あるビルの前に来たときだった。目の端に黒い影が映った。白の中に黒。俺はハッとそちらを向いた。目に映ったものの正体は人だった。否、人だったものと言った方が正しいかもしれない。なぜなら、その体はもう半分以上白いものへと変貌していたからである。

俺は驚いてひっと喉を鳴らした。その音で気づいたのか。白い彼がこちらを見てきた。目が合って、俺はさらに恐怖した。足が震える。彼はなおもこちらを見てくる。口が小さく動いた。

「何を言っているんだ？」

俺は震える足を奮い立たせて、彼の方に近寄った。彼はじっと俺を見ている。まるで俺に何かを伝えようとしているかのようだ。

「おい、どうした？ ていうか、その体は何なんだ？」

「さわ……な……t……」

彼は喉から絞り出すようにして何か言っている。けれど、俺は彼が何と言っているのかよく分からなかった。

「何だ？ 何を言っている？」

「さ……るな……t……」

こんどもはつきりとは聞こえなかったが、その前の言葉と合わせて考えると、彼はこう言っているようだった。

—— 触るな、Tに

「どういうことだ？ Tに触るなって……だってあれは、」

「うああっ！」

「あ、おいっ！ 大丈夫か！」

突然彼が苦しみだした。白が彼を侵食していく。そして、みるみる彼は喋ることもできないモノになった。その体はもう意思も何も無いものと化した。

「一体どうなってんだよ……。こいつはなんでこんなものになったんだよ。あと、Tに触るなってどういうことだよ。だってあれは、ただの……」

「豆腐じゃないか……」

俺はただ一人、白い街の白いモノの前で立ち尽くしていた。